

目 次

第1章 負債の概念

—言語的アプローチからの考察—	1
1.1 はじめに	1
1.2 負債におけるマイナス概念の吟味	3
1.2.1 負債と資本等式	3
1.2.2 負債と債務	10
1.3 デノテーションとコノテーション	13
1.3.1 デノ/コノの言語階層について	13
1.3.2 会計とデノ/コノの関係について	18
1.3.3 本書におけるデノテーション, コノテーションの意味	22
1.4 企業会計における負債の意味	25
1.4.1 負債概念の積極的な意味	25
1.4.2 負債におけるマイナス概念の可能性	26
1.5 負債概念の構成	27
1.5.1 負債概念の構成要素	27
1.5.2 負債に関する2つの認識について	30
1.6 おわりに	31

第2章 負債なるものの認識について

—年金会計をめぐって—	33
2.1 はじめに	33

2.2	負債認識と会計言語	36
2.3	企業会計と年金基金の会計	41
2.3.1	年金負債という概念	41
2.3.2	企業会計と年金基金	46
2.3.3	経済活動の分離と統合	48
2.4	<負債>なるものの認識	50
2.5	おわりに	53

第3章 負債概念と会計認識

	—ピエール・ラセーグの所説をめぐって—	55
3.1	はじめに	55
3.2	会計言語と会計概念	58
3.2.1	信託の法理と会計	58
3.2.2	会計の概念と観念	60
3.2.3	負債概念と会計概念	63
3.3	ピエール・ラセーグの会計理論	66
3.3.1	ピエール・ラセーグの会計認識	66
3.3.2	ピエール・ラセーグの問題点	73
3.4	会計認識の問題点	75
3.5	おわりに	77

第4章 負債の定義の可能性について

	—会計と言語をめぐって—	79
4.1	はじめに	79
4.2	会計言語の階層	80
4.2.1	資産と負債の言語位相	80
4.2.2	資産と負債の非対称性	85

4.2.3	負債概念と時制のズレ	86
4.3	負債の定義の可能性について	89
4.3.1	オープン・テクスチャー	89
4.3.2	負債の定義の可能性	92
4.4	お わ り に	95
第5章	負債認識の〈主体〉について	97
5.1	は じ め に	97
5.2	会計・経済・法	100
5.3	負債と財産概念	105
5.4	見なし債務とは何か	107
5.5	負債認識の〈主体〉	109
5.6	お わ り に	112
第6章	財産概念と負債について	
	—あいまいさと自己欺瞞—	115
6.1	は じ め に	115
6.2	リース会計の言語的位置づけ	117
6.3	財産という概念	119
6.3.1	財産性と法的形式	119
6.3.2	会計文化と財産概念	123
6.3.3	財産という言葉について	124
6.4	会計言語の「あいまいさ」	126
6.4.1	「あいまいさ」の問題	126
6.4.2	財産から資産へと，資産から財産へ	129
6.4.3	負債は財産か否か	133
6.4.4	原理・原則のあいまいさ	134

6.5 お わ り に	136
第 7 章 負債会計の言語的枠組み	
—資本等式への回帰をめぐって—	137
7.1 は じ め に	137
7.2 資本等式の再考	139
7.2.1 デノテーションの資本等式について	139
7.2.2 コノテーションの資本等式の可能性	142
7.3 負債と解釈について	146
7.3.1 会計言語と負債	146
7.3.2 <解釈>可能性	149
7.4 資本等式への回帰	151
7.4.1 2つの資本等式	151
7.4.2 会計言語と資本等式	153
7.5 お わ り に	154
初 出 論 文	157
索 引	159